7 月 24 日のメッセージ

聖書：テモテへの手紙一　3：　14 – 16

「信心の秘められた真理」

この世は多くの言葉に、また情報に満ちています。しかし、その多くは真理ではありません。

「このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。」(ガラテヤの信徒への手紙 5:8)。パウロは神ならぬものからの誘惑に打ち克つようにと勧めています。その思いに応えるには、しっかりと神の言葉に聞くしかありません。しかし、どれが神の言葉で、どれが神の言葉ではないとわかるのでしょうか。

ダビデの後を受けて王となったソロモンは知恵に満ちていたと聖書は記します(「……あなたは……訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。見よ、わたしは……今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。……」列王記上 3:11-12)。正しく聞き分け、正しく裁く力を与えられていました。その名声はイスラエルに留まらず、近隣にまで響いていました。それを聞きつけたシェバの女王がソロモンのところに来た時、難問をもって彼を試そうとしましたが、ソロモンはその全てに答えたといいます(「ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は何一つなかった。」列王記上 10:3)。「分からない事、答えられない事は何一つなかった」とは実にうらやましい限りです。

ところが、知恵に満ちたソロモンもやはり一人の人間に過ぎません。老いると妻たちに惑わされ、神から心が離れたといいます(「ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、……自分の神、主と一つではなかった。」列王記上 11:4)。どれほど知恵に満ちた人間でも、全てを正しく聞くことはできはしないということを示すかのようです。

全てがわかる、全てが見えていると思っていても、それは自分の思うところだけを見ているに過ぎないのです。やはり、神によって、イエスによって目を開いてもらわねばなりません。それも、一度ならず、二度、三度と、何度も目を開いていただかねばなりません(「すると、盲人は見えるようになって、言った。『人が見えます。木のようですが、……』そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、……何でもはっきり見えるようになった。」マルコによる福音書 8:24-25)。

神の言葉に聞く、すなわち聖書と向き合うとは、神によって目を開いていただくことに他ならないのです。自分自身に固執せず、素直に神の言葉と向き合う時、「光が射し出で／無知な者にも理解を与え」(詩編 119:130)られます。無心で聖書を開くとき、神が言葉をもって私に語りかけてくださいます。

そして、私たちはその語りかけによって自分の寄る辺を再確認するのです。私たちは十字架のイエス、復活のイエスをこそ、自らの救い主、キリストと受け止めているのだということを。

パウロは、そのことを「信心の秘められた真理」(テモテへの手紙一 3:16)と言い表し、その真理に従うことによってのみ、キリスト者として歩むことができると言います。何が正しくて何が間違っているかを自分勝手に判断するのではなく、聖書に示された真理と向き合い続けることによってのみ、私たちはキリスト者として歩むことができる、と。

ただ、一人だけでこの真理と向き合おうとする時、自分中心で身勝手な受け止め方になってしまう危険が常に伴います。だから、「真理の柱であり土台である生ける神の教会」(テモテへの手紙一 3:15)が大切なのです。

共に集い、共に聞き、共に祈る。その時、私たちは独りよがりの信仰から離れ、真理に従う一人となっていることでしょう。これからも共に聖書に、神の御言葉に聞き続けて参りましょう。